

## 第8回東京女子医科大学メンタルヘルス研究会

日 時：平成24年7月18日（水）18:15~20:00

会 場：東京女子医科大学 総合外来センター 5F 大会議室

## 開会の辞

## Session 1 症例発表 18:30~19:00

広場恐怖症を合併した切迫早産妊婦の管理経験

(神経精神科) 石郷岡純

座長 (高血圧・内分泌内科) 市原淳弘

演者 (産婦人科) 駒形依子

(産婦人科) 小川正樹

コメンテーター (産婦人科) 松井英雄

## Session 2 特別講演 19:00~20:00

ベンゾジアゼピン系薬剤の適正使用について

座長 (神経内科) 内山真一郎

演者 (神経精神科) 稲田 健

(循環器内科) 萩原誠久

## 閉会の辞

共 催：東京女子医科大学

ファイザー株式会社

## 広場恐怖症を合併した切迫早産妊婦の管理経験

(東京女子医科大学産婦人科) 駒形依子・  
小川正樹・橋本誠司・櫻井理乃・  
菊浦沙織・寺田美里・土山史佳・  
佐々木かりん・金野 潤・三谷 穰・  
牧野康男・松田義雄・松井英雄

〔緒言〕広場恐怖症 (agoraphobia) は、パニック障害に分類される精神疾患の一つである。繰り返すパニック発作により、ある一定の場所を恐怖の対象とし、その場から逃れられない、または避難できないという心理的葛藤の結果、外出など、戸外に出ることを恐怖の対象とする不安発作の一つとして捉えられている。今回われわれは、本疾患合併妊娠で入院管理を必要とした切迫早産妊婦の1例を経験し、分娩まで管理しえたので報告する。

〔症例〕38歳の初産婦。28歳時に海外生活中に狭い空間に閉じ込められたという経験から、以後同様な状況での不安発作を自覚するという既往歴を有している。今回妊娠は、高プロラクチン血症および両側卵管閉塞を原因とする不妊症により生殖補助医療により成立した。前医で妊婦健康診査が行われたが特変なく経過した。プロラクチン分泌抑制目的にドパミン作動薬であるカベルゴリン (cabergoline) を妊娠26週まで服用していた。妊娠28週時点です子宮頸管長の短縮 (12mm) を認め、切迫早産の管理目的に前医に入院管理となった。安静療法にもかかわらず、前医2人部屋に入院中に息苦しさなどの不安発作を訴え、廊下を徘徊したりするなどエピソードが認められた。前医での入院管理は困難と判断され、妊娠28

週後半に当院に転院となった。入院後、切迫早産に関しては、積極的な管理が必要とはされなかった。当院の神経精神科を受診し、広場恐怖症と診断された。以後、複数人部屋入院とし、適宜車いすで窓の外を積極的に見せるなどの生活指導により、薬物療法を適応せずに、不安発作を発症することなく経過した。妊娠36週に切迫早産が軽快し退院となった。妊娠37週で分娩開始のため入院となり、分娩室の出入口を全開放するなどの措置により、分娩は特に問題なく経過し経膈分娩となった。〔考察〕近年、不安発作を合併する妊婦は増加している。精神科と共同し、病態に応じた管理を行う事で対処しうることが示された。また、妊娠中に不安症状を訴える場合には、精神科と積極的に協同的な管理が必要である可能性が示唆された。

## ベンゾジアゼピン系薬剤の適正使用

(東京女子医科大学病院神経精神科) 稲田 健

ベンゾジアゼピン (BZ) 系薬剤とは、GABA-BZ受容体複合体に作用する薬剤で、睡眠薬・抗不安薬として、幅広く使用されている薬剤である。BZの効果は非常に高く、安全性も高い薬剤であることから、臨床上ももっとも汎用される薬剤の一つであり、当院においても、ほぼすべての診療科で処方されている。

BZには依存性の問題があるが、依存の形式としては渴望感が少なく、中止時の離脱症状が中心であるため、依存には患者も医療者も気づきにくい。そして、問題が顕在化するときには他の副作用と重なり、転倒やてんかん発作などの大きな問題を生じることもある。このよう

な薬剤特性を踏まえると、医療者は依存性を含めた副作用について知る必要があり、患者さんにも啓発を行っていく必要がある。当院では、医薬品安全管理の一環として、BZ 依存の啓発のための活動を行うべく準備を進めている。具体的には、「BZ 依存に関する患者さん用のパ

ンフレットを用意し、一定以上の量/期間にわたってBZの処方を受けている患者さんに配布する。患者さんから精神科受診の希望があれば、受診を勧める。」といった活動を計画している。